



学校だより

平成 26 (2014) 年 6 月 7 日

カンタベリー日本語補習校

校長 古川 明

《 ニュージーランドで思うこと 》

6 月（水無月）に入り、ニュージーランドは冬の季節を迎えています。

クライストチャーチの冬は、一日の天候が冬の嵐と暖かな太陽の日射しが交互に訪れ、目まぐるしく変わります。空から降ってくるあられは、地面を瞬く間に白くします。嵐が過ぎ去った後、澄み切った青空と低い山々の雪化粧は、とても美しい光景です。

クライストチャーチは南緯 43 度を越えていますが、北緯 43 度の北海道札幌市付近と比較して穏やかな気候であると思います。特に、北海道の冬は大変厳しいため、人間の命を奪うこともあります。地球上には様々な自然環境があり、その自然環境に適応しながら、今日まで人間は生きてきております。

近年、地球環境の破壊が急激に進む中、それに伴い気候変動も激しくなり、予期しない自然災害が世界各地で起きています。

南太平洋の絶海の孤島イースタ島（南アメリカ大陸沖にありチリ領）には、海を背にしてモアイが立っています。このモアイは、いつ、だれが、どんな目的で作ったのでしょうか。そして、モアイを作った人々は、どこへ行ってしまったのでしょうか。詳しくは、中学校国語科 2 年の教科書(モアイは語る——地球の未来)p.162~p.168 に掲載されていますのでご覧ください。

この事例は、私達人類に地球環境を守り、大切にしていくことを指し示していると思います。宇宙飛行士は地球をまわる人工衛星に滞在しながら、暗黒の宇宙空間に浮かぶ地球を宇宙から観察し、その美しさに感動したことを機会あるごとに話をしています。この美しい地球環境を、どのようにして子孫へ引き継いでいくのでしょうか。現代の私達に、大変重い責任が課せられていると思います。

ニュージーランドの豊かな自然を身近で感じながら、地球環境の保全に力を入れ、自然との共生を大切にしているニュージーランドの人々から、大いに学ぶべきことがあると思いました。

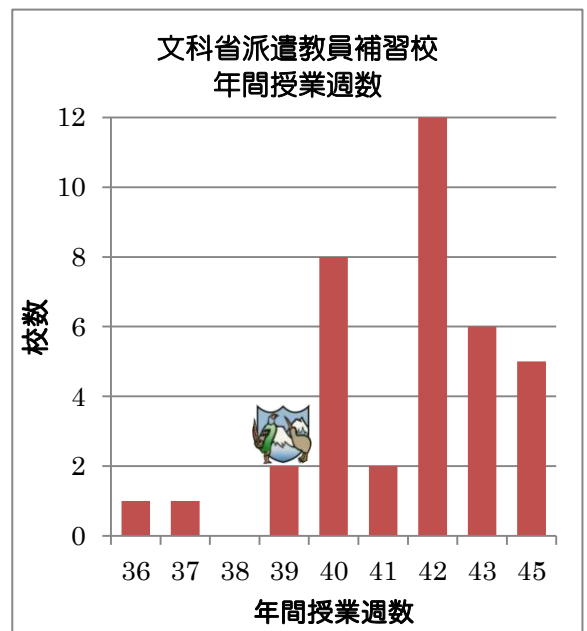
《 補習校での学びとは 》

先日の授業参観並びに年次報告会に、ご参加いただきありがとうございます。

小学部 1 年生は、教科書を使っての勉強が 1 ヶ月経ちました。担任の先生の話をしっかり聞きながら一生懸命に勉強する姿が、とても印象的でした。また、新しい学年に進級した子どもたちは、以前より学習する範囲が広がり、内容も少し難しくなったと感じているかもしれません。勉強は、新たな知識や技能、さらには以前に学んだことを基に考えたり、新しいことに気づいたり、友達の考えを聞いて自分の考えと比較したり、深めたりしながら、考える事の大切さを学んでいくことも大事な勉強です。一度だけ学んで理解できる子どもと、二度三度と学び直しをすることで知識や技能が定着する子どももいます。

国内の教育環境であれば、各教科の指導計画も標準的なものとして計画され、クラスの状況に応じて復習の時間も確保できます。しかし、海外にある補習授業校（派遣教員のいる補習校）では、一部の補習校を除き土曜日みの学習であり、右のグラフのように年間授業時間数は平均で 210~250 時間（5~6 コマ×42~43 週）で行っています。そのため、標準的指導計画より 1.5 倍前後の速さで授業を進めることとなります。この場合でも、復習の時間や課題について調べ・まとめる時間、作文を書く時間、音読の時間について十分確保することは難しく、家庭での学習と補習校の学習が統合されて、確かな学力を育てることとなります。

確かな学力とは、関心・意欲、豊かな体験、活用力、思考力、判断力、表現力、知識、技能といった力が統合され、一体となった学力です。確かな学力を向上させるためには、基礎・基本の新しい知



識や技能を習得することにとどまることなく、今までの知識や技能を活用して新しい解き方や考え方、あるいは新たな学習方法を用いて課題を解決、探究することが必要です。日本語を用いての知識、技能の習得を図り、その知識、技能を活用しながら思考力、判断力、表現力を向上させていくことが、本補習校の目的です。

右下のグラフは、国内の学力がどのように推移してきているかを示したものです。2006年を境に、学力の上昇がみられます。文部科学省は、1990年代の学習指導要領に補強・修正を加え、子どもたちに確かな学力を身に付けるため2002年から実践研究を重ねて来ました。学力向上の改善策として、①授業時間数の確保・増加②既習内容を基に子どもに考えさせる時間の確保③学習内容の増加④ドリル・スキル学習の確保⑤家庭学習の確保・推進等が主なものでした。学校内では、授業研究を行い、講師を招いての研究協議会が開かれ、教師は授業改善のための工夫を熱心に取り組みました。地道な努力の甲斐もあって、学力はようやく向上してきました。

本校における学力向上策は、①授業研究を全教員が行い授業改善に努める②学習内容の増加③ドリル・スキル学習の確保④家庭学習の確保・推進の4点に力を入れてきております。しかし、授業時間数の確保・増加と既習内容を基に子どもたちに考えさせる時間について、十分な時間が確保されていません。

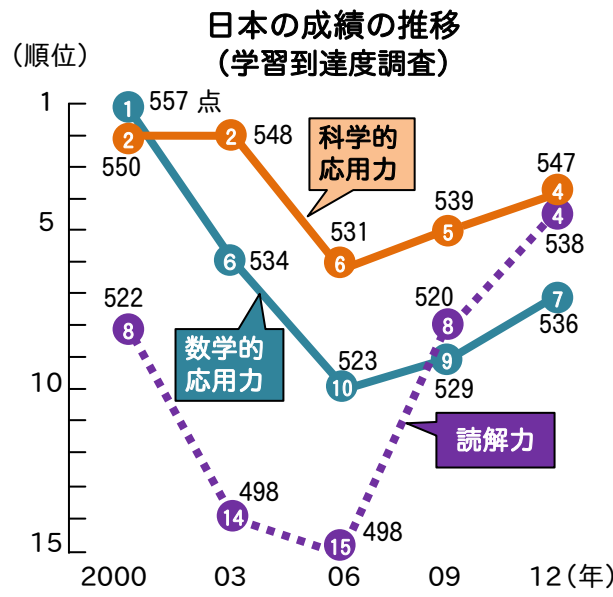
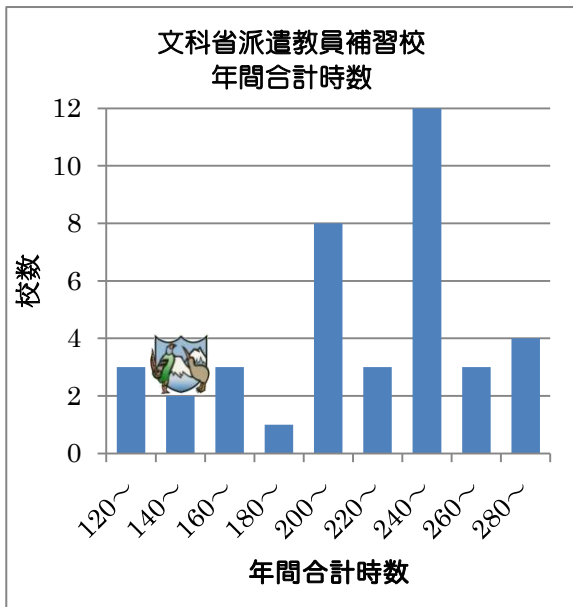
このような状況下にあって、日本の政府から認可を受けた本補習校は、再び国内の学校で教育を受ける時、スムーズに適応できるよう、国内の小学校又は中学校の一部の教科について、基礎・基本を習得するための授業を行うことを目的としています。そして、補習校の学習は、日本の教科書を用いて、日本語で行い、学習指導要領の国語、算数・数学、社会の指導目標達成をめざして授業を進めることになっています。

国内においては、全国学力・学習状況調査が小学校第6学年と中学校第3学年の全児童・全生徒を対象に実施されています。

問題Aは、「身につけておかなければ後の学習等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など（主として「知識」に関する問題）を中心」としています。問題Bは、「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容（主として「活用」に関する問題）を中心」としています。

補習校の教育課程は、指導時間数があまりにも少ないため、国内同様の学力を求めることに無理があります。しかし、学習指導要領に則して補習校の子どもたちの学力・学習状況を把握・分析し、教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる必要はあると考えています。

補習校に通う子どもたちは、今後益々グローバル社会が進行し、多文化の中で共存し、多面的価値や多面的見方が尊重され、共存・共有な生き方が指向されていくものと思われます。そのような社会で生きるためには、様々な課題への対応力が問われ、課題を解決する力が必要になります。子どもの成長過程は、親の考えに依存しながら自立のため、そして時間をかけて自らのアイデンティティーを形成するため、社会の中で生活しながら考えを深めていきます。そのため、子どもに学ぶ力、生きた力(確かな学力)が、将来にわたって必要です。10歳までは、母語(日本語)の習得と活用・探究が必要で、日本語で考え、表現することを最優先で学ぶ必要があります。日本の文化を尊重し、文化の特色を説明できる人は、自らのアイデンティティーをより良く形成できるよう、グローバルな思考と行動を指向しているものと思います。大人も子どもも、これからの社会をどのように生きるか絶えず問われ続けています。より良く生きるためにも、勉強すること、学習することが、一生継続することになります。一生に一度の人生であれば、これからもより良く生きたいものだと思います。



お知らせ 行事予定の変更

- 「全校写真撮影」は6月14日に変更になりました。遅刻・欠席のないようお願いいたします。
- 「音読発表会」は9月27日へ変更になりました。